



A L P S CAREER

<シリーズ連載：今求められるキャリア開発 第33回>

2回の中国駐在を経験して ——浙江大学と上海事務所

はじめに

私は語学研修生として1997年から98年にかけての7か月を杭州で、県事務所の駐在員として2005年から09年までの4年間を上海で過ごしました。駐在期間の公私にわたる印象に加え、私自身の中国との関わりについても記してみたいと思います。

中国との出会い

大学の第2外国語において、選択した多くの方がそうであるように、私も「同じ漢字を使っているからある程度は理解できるはず。」との思いから、中国語を選択しました。これが、私と中国との関わりの第一歩です。当然ながら、週数回、それも読解中心の授業では語学をマスターするには到底及ばず、当たり障りのない成績で単位を取得しました。



湯川 直

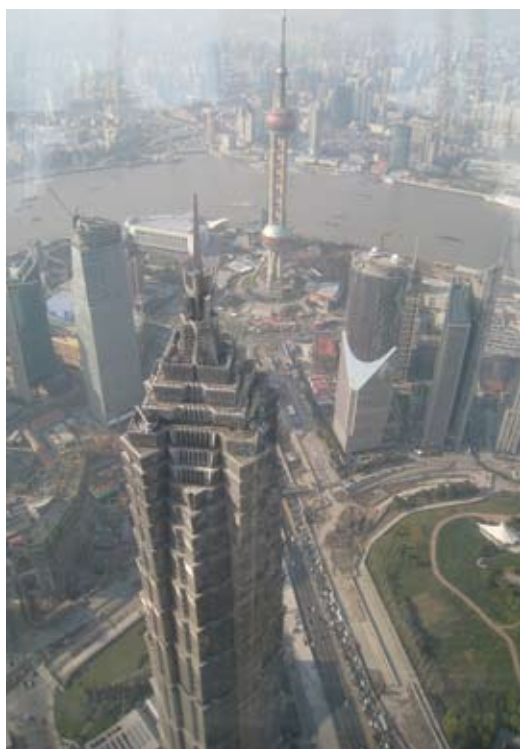
福井県観光営業部観光振興課主任

【ゆかわ ただし】1967年11月福井県小浜市生まれ。1991年3月法政大学法学部卒業後、同年4月福井県入庁。農業経済課、国際交流課、高齢福祉課、都市計画課、企業立地マーケット戦略課などを経て、2005年3月から2009年3月まで県上海事務所駐在。同年4月より現所属。

浙江大学派遣研修

福井県入庁直後は、県税を扱う出先機関に配属されました。93年の夏、当時の上司の勧めにより、青少年活動として中国・韓国を船で訪問する「近畿青年洋上大学」に福井県員として参加しました。これが私にとって初めての海外渡航であり、中国では大連・天津・北京等を訪問しました。各地で日本語専攻の中国人学生が団についてくれますが、彼らの食欲に日本語を習得したいという姿勢と日本語力の高さに驚いたことが印象に残っています。同時に、外国へ訪問しているのに、その国の言葉で何一つ自分の意思が伝えられないもどかしさも痛感しました。

福井県と浙江省は90年に友好協力協定を、93年には発展的に友好提携を締結しています。当時、県には友好省の状況



上海 浦東新区

を理解し、かつ中国語を習得する目的で、現地の大学に職員を派遣する研修制度があり、97年にその研修に参加する機会を得ました。

派遣は年度に1名で、私は4代目の研修生でした。私の前3人は、各人とも大学で専攻するなど既に中国語が話せる職員であったため、言わばブラッシュアップのための派遣でした。一方、私は前述のとおり、中国に興味はありながらも語学力はほぼゼロに近い状態でした。人事担当もいきなり現地の大学へ送り出すには無理があると判断したのでしょう。私の代からカリキュラムが変更され、はじめに日本国内の中国語学校でピンイン（発音）と声調（抑揚）、基本的な文法構造等を数か月学習し、その後現地の新学期に合わせ9月に渡航、翌3月に帰国するシステムとなりました。

「中国語は、発音と声調ができれば半分はマスターしている」とも言われるように、日本国内で中国人教師から学んだこれらの基礎は、その後中国語を学び、話す上で大きな財産であると感じています。

浙江大学においては、中国語の習熟度に応じてクラス分けされ、中国語によって授業が進められました。私のクラスでも、各国の留学生が学んでいましたが、中でも驚いたのは、欧米やアフリカなどからの留学生がきちんと漢字をマスターしていることです。日本人の場合、ある程度の構成や法則が理解できれば、簡体字（中国における正字）の習得は容易ですし、日本の漢字と全く同じ字も少なくありません。そのような中、休み時間を利用して一生懸命に漢字の練習をしている非漢字圏からの留学生には、頭の下がる思いでした。

私達が中国語を学んでいる一方、大学には日本語を学んでいる中国人学生がいます。学内の催しなどを通じて、多くの中国人学生（と言っても、私は当時30歳、相手は20歳前後）とも知り合いました。ある寧波出身の学生とは、のちの上海事務所駐在時代に彼の結婚式に招待されるなど、一生を通じた友人となっています。都合1年の中国語研修直後は、国際交流課に在籍し、技術研修員の受け入れ事業を担当するなど、業務を通じて中国との関係を保つことができました。

上海事務所駐在

県という組織の一員である以上、人事異動はつきものであり、国際交流課勤務ののちは、海外とは縁のない所属をいくつか回りました。

ある所属での勤務がもうすぐ1年経とうとしていた04年3月、上海への駐在準備として国際経済部門への異動を命じられました。そして、中国へ進出している県内企業を訪問しての各事業の把握や中国語の復習など、1年間の準備を経て05年3月1日に渡航しました。

本県の海外事務所開設は、ニューヨーク、香港、ミラノに次いで、上海は4番目でした。その後、海外支援体制の強化・再編が行われ、ニューヨークとミラノを閉じ、現在は香港と上海に海外事務所の資源を集中しています。

上海事務所の業務は多岐にわたりますが、主には、

- ・ 県内企業の中国販路開拓の支援（企業マッチング等）
- ・ 中国からの観光誘客（旅行会社等への働きかけ）
- ・ 「福井県」や「福井ブランド」の認知度アップ

・ 友好県である浙江省政府との連携
・ 華東地域をエリアとする福井県人会の運営
などが挙げられます。また、

・県内メディア等を通じての中国事情の伝達（電話等による出演）

・業務帰国時の「駐在員セミナー」における講演

など、県民に向けた情報発信も重要な業務です。

上海事務所を担当エリアは、中国のうち、香港・マカオ・広東省（上記は香港事務所担当）を除いたエリアと定められています。海南省は香港事務所エリアのようですが、なぜか上海事務所の担当となっています。

ちなみに、上海からの出張回数が多いのは、圧倒的に浙江省内。次いで北京市、江蘇省の順でした。最も遠隔地への業務出張は、県立恐竜博物館の職員に同行した雲南省（恐竜化石の産地）でした。

中国側との業務上の会話は、日本語と中国語を使い分けました。情報収集や事務連絡では、相手が日本語を話すのであればそれに甘え、日本語を解せない場合は中国語で行いました。一方、少なくとも交渉が伴う場面においては、相手方が日本語を解する（または日本語通訳を準備する）か否かを問わず、事務所アシスタントなど当方で準備する通訳を通す形で行いました。後に言った言わないというトラブルを避けるためでもあります。ただし、交渉の本論が終わり雑談に移ってから、なるべく中国語で話すよう心がけました。

妻の上海生活

私の4年にわたる上海生活は、数か月の単身赴任からスタートしました。当初より家族の帯同を予定していましたが、当時、義母が末期のがんで、あと数か月もつかどうかという状態でした。妻には、最後まで義母を看病し看取りたいという思いがあり、私もそうしてほしいと願っておりしました。

本県は、駐在員自らが住居を手配し契約することになっています。私も05年3月1日の渡航直後に住居探しをしました、その住居探しの期間約1週間だけ、義母を帯同しました。短期間ではありましたが、義母の体に負担がかかることは目に見えています。連れて行くことに迷いがなかったと言えば嘘になりますが、余命数か月の義母に、これから夫婦で住む上海の住まいを見せて安心させたいという妻の思いを優先しました。

その3か月後、義母は息を引き取りました。私自身は最期を看取することはできず、亡くなったという連絡を受けての一時帰国となりました。夫婦で住居を決めて案内した際の「これからここに住むのね。いい部屋が見つかって良かったね。」という義母の声と安心したような笑みが今でも忘れられません。

娘として遺品を整理した妻は、同7月に上海にやってきました。駐在期間中、



着物の着付

リビングに義母の写真を飾り、旅行の際は持ち歩くのが夫婦の習慣となりました。

妻は、後に、上海で生活することに対する期待は大きくはなかったと言っております。浙江大学研修中（結婚前）に一度杭州へ呼んだことがありましたが、日本に比べての猥雑さや衛生状態などが合わなかったようです。10年近く経って上海に来てみるとその差は小さくなっており、偶然、本人の友人（日本人）も仕事の関係で上海に駐在していたこともあって、まあ何とかなるかといった印象でのスタートだったそうです。

ある日から、妻は一念発起し、ゼロから中国語を習い始めます。午前中は大学の外国人向けクラスで、午後は日本人向けの中国語学校で、私から見てもハードな日程をこなしていました。渡航直後は



新疆 交河故城にて

「ニイハオ」しか話せず一人で街に出すのも不安でしたが、4年後の帰任間際には、商店での価格交渉やタクシー乗務員へ道順まで伝えられるまでになりました。

中国語学習の一方で、日本で習っていた稽古事も続けたいとの思いから、着物教室にも参加するようになります。その教室の先生は、日本の某流派の教師資格を持った中国の方で、生徒は日本人、中国人、韓国人など様々です。妻は一定の経験がありましたので、時に先生の助手も任せました。着付けを披露する際、どこに力をかけていればより綺麗な形になるかがわかるため、よく「着させられ役」を仰せつかったことです。日本文化の紹介として着付けを披露することがよくありますが、重慶総領事館がその先生を招いた際に、アシスタントとして同行

し活動したことが一番思い出に残っているそうです。

上海事務所には、駐在員アシスタント（女性・妻より年長）が勤務しています。妻は彼女とも気が合いました。妻もアシスタントもそれぞれ兄弟姉妹に兄しかおらず、ちょうど姉妹に似た関係が出来上がったのかもしれない。私の帰任より一足先だった妻の帰国の際には、アシスタントが自家用車で空港まで送ってくれ、二人が涙ぐんで別れを惜しんでいたの思い出されます。その二人は、今も、メールの交換を続けています。

日本（人）に対する思いとは？

上海赴任直後の05年5月、それまで他都市で発生していた反日行動が、上海にも飛び火しました。デモが発生し、総領事館の壁がペンキ等で汚されたほか、日系企業の店舗や看板が破壊されました。日本のメディアでも繰り返し現場のVTRが流れたので、皆さんの記憶にも残っているかと思います。

このとき、私の身を心配して一番に電話をくれたのは、浙江大学研修時代の友人でした。その後、浙江省政府の同年代の職員など中国の友人から、次々と安否を問う連絡が携帯電話に入りました。日本人はこの国で歓迎されないのではないかと、ゆくゆく妻を呼び寄せても大丈夫だろうかという不安が赴任早々から募る毎日

でしたが、これら中国の友人の気持ちに勇気づけられ支えられました。

例えば、浙江大学研修中にも、印象に残る出来事がありました。

春節（中国の旧正月）を中国の友人の親戚宅で過ごしたことです。その場所は都市部からバスを乗り継いで丸1日かかる、いわゆる農村でした。道路には豚や鶏などが放し飼いにされており、一般家庭に冷蔵庫はない状況です。その村に着いたときから、住民の目が常に私に向いていることに気付きました。ある村人が「日本人がこの村に来るのは2回目だ。」と言うので、単に外国人が珍しいのだろうと「私の前は、いつ頃誰が来たのか。」と何気なく尋ねたところ、「戦争中に日本兵がこの村に来た。その次があなた。」との返事でした。何とも言えない思いが湧いてきましたが、滞在中は村のどこへ行っても「○○（友人の名）の友達なら大歓迎だ。どうだ、日本の生活とは違うだろう。ウチに寄って休んで行け。」と話かけてくれ、歓迎してくれたことを覚えています。

また、上海駐在の間には、よく次のようなことを経験しました。

業務上のアテンドや私的な旅行で、各都市の観光地を訪れる機会があります。その際、地方からの中国人団体旅行者とよく遭遇するのですが、こちらのグループが日本語で話していると「○○（日本



青蔵鉄道 後部車両より

人に対する蔑称」がこんなところに来て
いるぞ。」という言葉が聞くことが少なく
ありませんでした。私達に面と向かって
言うわけではないので、中国語を解しな
い私の同行者は、単に中国人が会話を
しているだけに聞こえるのですが、私の耳に
は彼らの発する日本人の蔑称が次々と入
ってくるのです。これは、上海や北京と
いった大都市において聞こえてきたこと
はなく、決まって地方の観光地で遭遇す
るのです。

この出来事を上海出身の中国の友人に
話したところ、彼の分析は次のとおりで
した。①都市部の人は現在の日本人を見
慣れているが、地方在住者は日本人に会
ったことがなく教科書やテレビで見たこ
とがあるのみ。②団体旅行で気分が高揚
しているところへ初めて日本人（と思わ
れるグループ）に遭った。③その場の盛
り上げとして蔑称を発してみた。

そして、友人の助言に従い、次の機会
を待って蔑称を発する彼らに中国語で言
ってみました。「私は日本人ですが、日
本人を見るのは初めてですか？」と。た
いていは決まり悪そうに立ち去る結果が
多く、これも友人の予想どおりでした。

現在

帰任から2年半が経とうとしています。
現在、私が所属する観光振興課の業務の
ひとつに海外からの誘客があります。私
自身は主担当ではありませんが、中国事
情の説明や中国語のサポートなど、自分
のできる範囲で担当者を支援しています。

また、県では毎年、浙江省から国際交
流員を招いて中国関連の業務や中国語の
翻訳・通訳を担当してもらっており、時
として、彼らから日本語の言い回しの相
談を受けることがあります。お互い母国
語ではない言語（交流員にとっては日本
語、私にとっては中国語）への翻訳・通
訳は、文法上は間違いがなくても、果た
してその場にふさわしい言い回しとなっ
ているか不安があり、お互いに協力して
チェックを行っています。時には交流員
を我が家に招いて食事をしますが、この
ときは、妻も上海で学んだ懐かしい家庭
料理に再チャレンジしたり、写真を見な
がら当時の生活を振り返ったりと楽しん
でいます。

私の中国との関わりを通じ、生まれ育

った実家にも変化がありました。実家では
定年退職した父母が二人で暮らしてい
ますが、地元の自治体が行う中国との交
流行事に積極的に参加し、また、短期で
はありますがホームステイを受け入れる
ようになりました。私達夫婦が多くの中
国の方にお世話になり無事帰任できたこ
と、そして現在も多くの方にお世話にな
っていることへせてものお返しができ
れば、との思いからだそうです。父母は
当然中国語はわかりませんが、傍らで黙
って見ていると、ゆつくり話す日本語と
大げさな身振り手振りでコミュニケーション
をとっており、微笑ましくも見えて
きます。

おわりに

記してきましたように、2回の中国駐
在においては、現地の多くの方に助けら
れながら過ぎてまいりました。また、国
境を越えて、一生の友人にも巡り合うこ
とができました。

「中国」は、これからも私の人生の中で、
公私にわたり大きな部分を占める要素と
なるはずです。これまで培ってきた多く
の中国の友人との関係を維持するよう努
めるとともに、新しい友人に出会う機会
を自身で探していきたいと思っています。
合わせて、良好な日中関係が永く続く
ことを祈っています。